

檸檬の棘

——生徒に目を合わせる事が出来ない教師。

それが自分だと思うと情けなかった。いや、教師としてではない。28歳の大人として消えてしまいたかった。目を見て話することはコミュニケーションの基本である。それができない。朋美は、温かいとか、柔らかいとかを感じる部分が欠落している。育ちのせいなのはわかっていた。認めたくなかった。なんとかしたいと思ってぐるぐる回ってきたが、この歳になるまでどうすることも出来なかった。

次々に子どもたちは登校してくる。朋美と校長の宮下は校門前に立っていた。『秋のおはようウィーク』だった。うろこ雲が校庭の空に広がり、金木犀はもうじき終わろうとしていた。

「ほら、また」

「はい、すいません」

「最期まで目を見て」

「ごめんなさい」と校長に謝った。今朝だけで10回は叱られている。

「でもずいぶん出来てきた。ホツとした。フフ」

宮下の言い方には棘がなかった。ベテランとか、女性校長とか、そういうことではなかった。宮下という人間に、棘がないのだ。

—— 棘とはつまり、人間愛のあるなし。

朋美は宮下の人間愛を信頼していた。

「難しいことないのよ。ほとんど出来てるの」

「はい、すいません」

「ほら六年生来た。笑顔よ。先生」

「はい。おはようございます」

—— そうよ。ちゃんと目を見て言えた。よかった。それでいいの。

宮下は小声で朋美を励ました。

「はい、すいません」

嬉しくて、泣きそうだった。

「言えばできる、朋美先生の長所。素直、素晴らしい、ブラボー」

「はい、すいません」

横浜郊外の高台に小学校はあった。朋美が古い団地脇に建つこの学校に赴任して五年目になる。コミュニケーションがうまく取れない朋美を、担任が務まるまで育て上げたのは校長だった。この出会いは奇跡だ。そして二度とこんな奇跡は起こらない。一生、宮下の傍に居るんだ。朋美はニコニコと子どもたちに挨拶している宮下の顔を見た。

今年の春、六年生の担任を受け持つことになった。

「それは、わたしには無理です」

と学年主任から正式な打診をされたとき、朋美はきっぱりとそれを断った。しかし、「急に当てにしてた先生が都合つかなくなってしまうってさ。まあ、低学年だろうと高学年だろうと、みんな、おんなじ。子供は子供だから朋美先生」

—— そんなわけない。

「それは違うと思います。わたしの力不足でクラスは崩壊します」と珍しく食い下がった。

「朋美先生は宮下塾の門下生なんだし、子供を愛する気持ちがあれば大丈夫」

と結局、うまく丸め込まれたものの、朋美の訴えは的中し、夏休み前に学級は崩壊した。担任を引き受けた自分の愚かさを嘆いた。あんなに断っておきながら、責任を与えられた嬉しさがどこかにあったのだ。認められたと有頂天になっていたのだ。食事が喉を通らず、朋美は瞬く間に五キロも痩せた。鏡の前でブラシを通すと、パサついた髪が汚く絡まっていた。

有頂天になったバチだと思った。

「お呼びでしょうか」

職員会議のあと、校長室に呼ばれていた。

「来たわよ。ウナギ」

「ウナギ？」

クククと校長は笑った。笑うと目尻にくつきりと二本線の皺ができる。その顔を見ると甘えたくなくなった。

「学校で鰻を飼うわけ無いでしょ？馬鹿ね」

「はい、すみません」

「でも面白いかもね、みんなで育てて最後は炭火で蒲焼、いま鰻高いからいいかも」

「ごめんなさい、聞こえませんでした」

「ウサギよ、新しいウサギ」

「ああ、はい、ごめんなさい。兎」

六年生はクラスごとに一匹ずつ飼っていた。しかし夏休みに朋美のクラスのウサギが死んだのだった。原因不明の突然死らしかった。

弱り目に祟り目というのか、朋美の指導力不足を指摘する声が一斉に上がった。わざわざ担任交代を学年主任に直訴してきた親もいた。保護者の圧力を警戒す教師の中から、朋美の続投を危ぶむ声が上がっていた。けれど校長の宮下は、ことごとくそれを突っぱねたのだった。

「ウサギが死んだことが、どうして朋美先生の責任になるんですか。みなさん。獣医さんも、原因不明の突然死だと診断してるんじゃないの。そんな根拠もないのに朋美先生のせいでウサギが死んだなんてこと、学校が鵜呑みにして担任を交代させるなんて。子どもたちに、そんな魔女狩りみたいなこと、どうやって説明するんですか」

新しく来たウサギはゲージに入っていた。

きれいな檸檬色のウサギだった。大きさも大きめの檸檬ほどもだった。ウサギというよりモルモットのようだった。まだ生まれて間もないのだと説明された。

檸檬ウサギはすやすやと眠っていた。抱きしめたくなるほど可愛い。子供を産んで育てる自信はないが、母性愛は持っている。朋美は女を感じていた。驚かせないようにウサギを抱きあげると、胸の中にうずめた。

「最近はこの黄色いウサギもいるのね」
校長も孫の頭をなでるように、ウサギに触れた。

「いるんですね」

「女の子よ」

「あつ、はい」

「ウサギって性欲が強いよね」

「そうなんですか」

「だからバニーガールなのよ」

だからなのよ、の意味がいまいちピンとこなかった。愛くるしいウサギと性欲が結びつかなかった。

「プレイボーイもウサギがシンボルなのはそれね」

「すいません、そういうことに疎くて」

「知らない？エロ本よ。そうね、知らないか」

「はい、すいません」

「弱いでしょ」

弱い？誰が？わたしが？性に対する知識が？

話の腰を折るようなことはしたくなかった。曖昧な返事を短くした。

「弱いから、子孫をたくさん残そうってことなのね」

「ああ、はい。なるほど」

自然界にはヒエラルキーが存在する。弱肉強食の食物連鎖だ。

下等類に属する鼠や兎は強い動物に捕食されるため、たくさんの子供を産まなくては子孫を残せない。

「昔いた学校でね、大変な目に遭ったの。狭い小屋の中で、オス同士でメスの奪い合いをしたり、馬乗りになって噛み付いたり、ケガしたり中には死んじゃったのもいて」

兎も鼠も人畜無害なマスコットとしての側面が強調されている。

しかし『本物』は、強い性欲を持つ生き物なのだ。

「何してるの何してるのって。特に高学年は関心あるでしょ、そうゆうことに」

「——はい」

「セックスしてるのよって。あたしこういうことポンポン言っちゃうのね。隠しても仕方ないもの。だけど、ありのままを、よく思わない人たちというのが力を持っているのね。学校はとくにそうかな。何度も会議して多数決をとって、ウサギはすべて去勢することになったの」

「あつ、はい」

「そうしたら。管理しやすくなったの。だけどね、朋美先生。つまんない」

「つまんない？」

「そう、弱くておとなしいウサギはつまんない。子供たちがね、関心示さないの」

「ああ、はい」

「去勢したらウサギのね、おしつことかうんちとか世話しないの。熱心だった子がね、去勢したウサギの世話はしなくなるの。フェロモンとか、ホルモンとかそういうことなのかな。大人が当番表を作って、義務として乗り切ったけど不思議だった。こういうこ

とがあつたの。どう思う?」

ウサギは教室で飼うことにした。連休などは教室に置いておくと心配なので、朋美の家に連れて帰ってもいいと校長は言った。ウサギの名前はレモンにしようかと校長と二人で決めた。

朋美は教室に向かって歩いていった。

レモンはゲージの中でも眠っていた。何人かの子どもたちが、新しいウサギに気づいた。

「かわいい」

「オス?メス?」

「メスよ」

「名前は?」

「レモン」

「やったー」

「ねー、また死んじゃったらどうするの?」

生徒の一人が、つぶやいた。

—— また死んじやったらどうするの？

朋美もそのことをずっと考えていた。ネガティブな考えが過りそうになるのを追っ払っていたのに、生徒のつぶやきで、急に心臓がドキドキした。

自分のネガティブな性格は、後天的なものだと思っている。

本当はとも前向きな女の子だったはずだ。

気の強い母は、朋美の父と早々に離婚し出ていった。朋美は父と娘の二人で、小田原の熱海に近い根府川で育った。父は役場に務めながら、ミカン農家を兼業していた。

朋美に金銭的な面では申し分なく育ててくれたが、それ以外は親らしいことは何一つしてくれなかった。

「困ったことは、これで解決しろ」と、子供には多すぎるくらいのお金を渡した。すべてお金で解決できると思う男だった。

小さい頃は家を出た母親を恨むことはあったが、物心つくとその男の元を出ていくのも無理は無い、そう思うようになった。「こんなにしてやってるんだから感謝しろよ」という言い方をする。一言でいえば、人間愛のない、棘のある人物だった。

色白で目鼻の整った朋美の顔立ちも、父親に似ていた。そのことをもつと感謝しろよ、酔うと決まって言い出すのだった。

だから可愛いねとか、美人だねと高校に入ってまわりが言い寄ってきたときも、一度も喜ばなかったのは、父親のことを褒められているような気がしたからだ。

思春期を過ぎて屈折したまま、軽度のコミュニケーション障害になっていた。大学一年のとき父親が突如消えて、障害は日常生活に支障をきたすようになっていた。

そんなとき友だちに誘われて、映画『二十四の瞳』の名作上映会を箱根の公民館に観に行つた。若い人は誰も観に来ていなかった。

小豆島の分教場で、一二人の教え子たちと大石先生が戦争に飲み込まれていく物語だ。自分を理解してくれる先生が居てくれたら、どんなにわたしは救われただろう。おなご先生に涙が止まらなかった。

渡り廊下を過ぎたあたりのことだった。クラスの女の子たちが駆け寄ってきた。その表情からただ事じゃないのだとすぐにわかつた。

「先生、たいへん」

「どうしたの？」

「とにかくたいへん、来て。やばい」

「落ち着いて説明してもらえろ？」

「喧嘩。喧嘩。やばい。血出てる」

心臓がドキドキした。大変なことが起きている。

—— こういう日がついに来たか。

朋美は教室に向かいながらそう思った。行きたくなかった。諍いや事件に巻き込まれたくない。面子よりも気持ち優先し、足がもつれて転んだ。ウサギのゲージが廊下を滑った。

教室は狂気と殺気で充満していた。男の子が暴力的に騒いでいる。

—— あんたたち止しなさい。

声を出しても、声にならなかつた。

むわっと血の匂いがした。見ると男の子が顔から血を流して倒れている。介抱してる少女のブラウスが真っ赤に染まっていた。

「このやろう、ぶっ殺すぞ」

「やれるもんならやってみろ」

「お前なんか死んじゃえよ」

目を背けると、すべてが無音になった。窓から秋の心地よい風が入ってきた。すべての窓を開けたかった。

—— お前なんか死んじゃえよ

高校三年生の卒業間近の春だった。ジャズ部で友達の子が朋美の家に来ていた。前から気になっていたカフェに行く計画を立てていた。お菓子を食べ、ビル・エヴァンスを聞き、うつ伏せになり、足をバタバタさせ、ケラケラと笑った。日曜日だった。

「うるせっ」と襖が開いた。父親だった。

「学校に行かせてもらってたから、お前も手伝えよ」

手には剪定ばさみを掴んでいた。そして朋美を睨みつけた。恭子に苦笑してみせ、両手をあげて（意味わかんない）という顔した。侮蔑の顔だったけれど、怯えているのが恭子にはわかった。

恭子は同調せず、うるさくして、ごめんなさい、静かにしますと父親に謝った。

父親は朋美の手を無理やり掴むと、庭先の檸檬の木へ連れていった。そして棘をすべて取るように命令した。足取りは酔っているようだった。

娘は男の手を振り払おうとした。そのはずみで、男はよろけ、檸檬の木に倒れた。

「痛っ」

男の頬に檸檬の棘が刺さり、傷になっていた。

—— どうしよう。朋美は冷静になった。

その瞬間、身体を突き飛ばされ、はずみで檸檬の棘が朋美の二の腕を引つ掻き、若くて白い柔肌は、薄いカミソリで切ったようにすっぱりと裂けた。

白いブラウスに血が滲んだ。

「お前なんか死んじゃえよ」と朋美は父親に言った。はずみで口をついたのだった。

「もういっぺん言ってみろよ」

父親は怒鳴りつけた。

「お前なんか死んじゃえよ」

我慢の限界だった。「死んじゃえよ」このくらい言っただけで構わないと思った。わたしの負った傷に比べれば、この程度、どうということないだろうと思った。

父親と娘はその日から会話がなくなり、ほどなくして父は家に帰らなくなった。娘もあえて、探す出して咎めるようなことはしなかった。このとき朋美は無関心を覚えた。

——バン。

大きな音がし、熱さを身体に受けたので、朋美は驚いて目を開けた。

キヤーという甲高い声が聞こえた。廊下に逃げ出す子どもたち。他のクラスの教師たちが騒ぎを駆けつけ走ってくる。

四角い教室の隅のゴミ箱からオレンジの火柱が上がっていた。薬品のような匂いがする。あつという間に炎は、子供たちの絵に燃え移った。

虹を写生したときの絵だった。朱を朱く、蒼を蒼く。ありのまま描いている。朋美は虹が描けなかった。絵の具を含んだ筆を持って、一向に進まぬまま、いつも濁った残念な虹になった。子どもたちの虹は美しく、そして、めらめらといつまでも燃えていた。

朋美は夕方過ぎに学校を出た。消防署や警察関係への説明、病院の付き添い、父兄への謝罪。

一日中、針の筵の上に朋美は座らされた。

今日の時点では結論は出なかったが、担任は交代することになりそうだった。もちろん、朋美に釈明の余地はなかった。

ただ、怪我人もなく、校長の説明と判断が的確だったことが救いだつた。朋美の責任論より、主犯の男子生徒の素行と今後の処遇が話の中心だつた。

朋美はむしろホツとしていた。トイレで顔を洗い、タオルで顔を拭いながら、

——このあたりで学校を離れるのは、いいタイミングだ。
と思つた。

明後日から通常授業に戻ることを取り決め、

「今日のみなさんひとまずお疲れでしょうから、解散にしましょう」と、校長のはからいで解散になつた。

西日が差す校門を出ると、金木犀の香りが強くなつた気がした。もう校門をくぐることはないだろうと思つた。ちつとも寂しくはなかつた。

しばらくして後ろで名前を呼ぶ声があったので振り返ると、校長の宮下が笑つて追いかけて来るのだつた。

「わたしも抜け出してきちやつた」と首をすくめると、駅まで帰りましようかと横に並んだ。

櫛並木が続く古い団地の中を歩いた。

秋桜が風に揺れ、マツムシが茂みで鳴いていた。西の空のうろこ雲は夜に変わろうと
していた。秋の干し草の匂いがした。

「この団地はね、昭和三十年代の後半から五十年代の前半にかけてできたのよ」
校長はシヨルダーバックを肩にかけ直して言った。

「京浜工業地帯で働く労働者のためにね、里山を造成して。あれから50年、植えた櫨も
こんなに大きくなった」

コンクリートタイルに覆われた、起伏のある道が駅まで続いていた。遠くで豆腐屋の
ラッパの音がする。団地の中は昭和の面影が色濃く残っていた。

「そうだ、朋美先生、いいものを見せてあげる」

校長は返事を待たずに、はしゃぐように歩き出した。その先には、大きな円柱形の給
水塔が見えた。不気味なほど大きかった。

「ごめんなさい、わたし」

朋美は先をゆく校長についていけなかった。立ち止まっていた。タイルの継ぎ目にオ
オバコが生えていた。

「陰日向の陰にいる子どもたちに、優しい眼差しを向ける先生になりたい。そう思って

先生になったの。この職業なら一生、自分を賭けることができる。そう思うと希望が湧いたんです。それで教師になったの。ほんとなの。だけど」

宮下は朋美のところに歩いてきた。そして、いつも子供たちにするように頭を柔らかい手で撫でた。

「でも、実際は違っていました」

「うん」

「強く芯のある太陽のような教師でなければ、陰の子どもたちにまで、光など到底届けられるものではない」

「それは。——— そうかもね」

と言つて、朋美の涙を宮下は萩の柄のハンカチで拭いた。ハンカチまで萩の匂いがした。

「自分にはその資質がまるでないとわかったとき、わたしは、すぐにも教師を辞めるべきでした」

——— 大丈夫、あなたは大丈夫。

校長先生も泣いていた。

朋美は嬉しいのと恥ずかしいのと情けないのとで、涙がとめどなく流れるのだった。

「泣いてはいけないの。甘えてはいけないの」

「いいのよ。いいの」

「今日一日、いや今までどれだけ校長先生に、わたし助けてもらったか。もうこれ以上迷惑をかけちゃいけない」

「迷惑なんか、かかってない。ちつともかかってない」

「わたしはだから、先生の元を離れなくちゃいけない。先生の足を引っ張っちゃいけない。独り占めしちゃいけない」

「そんなことない。そんなこと言ったらダメ。やだ」

そのあとの言葉は、二人ともいくら探しても見当たらなかった。

大きな円柱状の給水塔だった。これひとつで、この団地すべての世帯を賄うほどの飲み水が蓄えてあるほど大きかった。

「いまからやることは犯罪よ。これは、わたしの意思でやるんだからね」

そう言うと、宮下は南京錠を、その辺の小石で叩き壊した。

「!!」

朋美は驚いて、目をまん丸くした。

宮下は老眼鏡の奥でウインクした。

南京錠は給水塔のトップに続く螺旋階段の鍵だった。――器物損壊罪。そしてここ

からは、

「不法侵入罪よ」

「先生、ダメです」

「フフ、そんな怖い顔して。大丈夫見よ。みつかったら罪。見つからなければ、ただの

冒険」

――給水塔に登りたい。

――校長先生と一緒に、同じ景色を見たい。

若いカップルの声がしたので、朋美と宮下は慌てて、扉の中に隠れた。通り過ぎるまで息を潜めると、二人は顔を見合わせて昇る決意をした。

階段を登りながら、最後の審判を受ける気分だった。朋美は怖くて半分目を瞑ったまま昇りきった。

流れ星が見えた。宮下は空を見ていた。

「ようこそ我が家へ。眺めだけはいいでしょ。どうぞ好きなところに腰掛けて」

宮下はおどけた。円いビルの屋上のような感じだったが手すりがちやちで怖かった。遠くには首都高のジャンクションとコンビニナートの灯りがチカチカと瞬き、メタリックの煙突からはオレンジ色の炎が出ていた。

「未来都市とはこういうものなのかしらね」

初めて見る光景だった。同じ海でも、自分の育った小田原の海とは全く違っていた。シヨパンより、ドボルザークがふさわしいという感じがした。

「起きてしまったことは、仕方がないわね」

宮下はパイプに腰掛けていった。ちょうど椅子くらいの高さだった。

「子供が勝手にやったことだもの。担任は責められるけど、どうすることも出来なかった」

「管理能力の低さ、事態の認識の甘さ、子供たちへの配慮の欠如、反省すべきところは多々あったと思います。わたしがもつとちゃんとしてれば、あんなことに」

朋美が言いかけると、救急車のサイレンが聞こえた。ドップラー効果で通り過ぎた。

その後は静かだった。

「あんなことに？」

「――」

「ならなかった？」

「少しは」

「そんなことないの。思春期の男の子が暴れたの。自分でもコントロールできないものを抱えてたの。だって去勢してないオスだもの」

朋美の頭に、馬乗りになつて暴れているウサギたちがフラッシュバックした。

「度が過ぎて、いたずらで火遊びして、水と間違えて消毒用のアルコールをかけたお馬鹿さんがいて。そしたら一気に燃え上がって。騒ぎになつて」

「はい」

「不運の積み重ねが起きてしまったら、わたしたち人間なんてどうすることも出来ないものよ」

―― 子どもたちと向き合わなかった。

―― ただやり過ぎすことで逃げてきた。

—— そのツケを今日払わされた。

宮下に告白した。校長は、—— わたしはそうは思わないけど、と慰めてくれた。

「ここから飛び降りて、死んじゃったほうがいい」

「ダメよ」

「死んだとして、輪廻転生で再びこの世に生まれてくるとしたら。わたし、人間は辞退しようと思います」

「それで何になるの？」

—— 何になろう。

朋美は考えた。

擲にでもなろうか。それともマツムシか。生き物はどれも大変そうだ。

「わたし、水になりたいです」

一息に言うと、朋美は海を見た。宮下は、いいアイデアねと言った。

水になろう。天と地をめぐる万物の恵み。

朋美は自宅に戻ると、珍しく湯船に湯を貯め浸かった。蛇口から湯が勢いよく出ているのずっと裸のまま見ていた。

曇った鏡に朋美の裸が写っていた。肋骨が浮き、薄い胸板は貧相だった。

浴槽に浸かると、重みのない身体は浮いてきそうだった。浴槽にしがみつくように捉まった。

その晩、朋美はなかなか眠れず、明け方にやっと夢を見た。

朋美の身体が給水塔に沈んでゆく夢だった。円塔に湛えられた真つ暗な哀しみ。その中へ身体が落ちるように沈んでゆくのがあった。

気持ちが悪かった。

ありのままに、温かく気持ちがいいことだと知った。朋美はそれが嬉しくてうれしくて、——泣いてしまう。

拭っても拭っても、まんまるの瞳から涙が溢れてきた。そして朋美の涙はやがてコップの水のように給水塔から溢れ出し、とくとくと団地へと流れ出た。浴槽から勢いよくあふれるお湯のようだった。

けれど静かで透明だった。音もしなかった。

溢れた水は駅までの小道に流れ、せせらぎとなり、やがて小川になったのだった。

小川のほとりで記憶の中の母が笑っていた。小さい朋美がピアノを弾いておどけてい

た。父も嬉しそうに歌っていた。

楽しかった。嬉しかった。悲しかった。切なかつた。夢でもいい。あとわずか。冷めずに家族の温もりを感じていたかつた。

そうして朝になった。

朋美は春まで休職することになった。校長の宮下のはからいだつた。

朋美の足元に黄色いものが転がっている。庭先で洗濯物を干していたときに踏んだのだつた。昨日の雨で落ちた檸檬だつた。

休職と不動産の更新が重なつたので、上大岡のDKの住まいは更新せず、小田原の実家に住まいを移すことにした。そこは根府川という小さな駅から、徒歩で15分のところだつた。時々風を入れに朋美が帰ってくるほかは、ずっと空き家のままになっていた。売りに出したところで買い手のつく地の利がない平屋の、小屋のような家だつた。

あの事件以来、人生を入れ替えたかつた。

毎夕、水平線に沈む太陽を見れば、生まれ変われる気がした。

小さな庭先には棘の残つた檸檬の木があつた。檸檬の実が二月の駿河湾の風に揺れて

いた。

駅前菓子屋に、檸檬のお菓子のポスターが飾ってあったところを見ると、このあたりの特産として売り出すつもりなのだろう。日当たりの悪い柑橘畑は耕作放棄され、だから日陰でも育つ檸檬を植えて特産にしようと、日に焼けたチラシにはそんなことが書かれていた。

朋美は檸檬ウサギを抱いて駅の南側に続く、砂浜へと出ていた。堤防沿いの道を歩いている人は冬とはいえ誰もいなかった。

生まれ故郷も過疎の町になっていた。冬にしては温かい風が海の方から吹いている。宮下はいつでも戻ってらっしゃいと送り出してくれた。

「ありがたいです、先生はわたしの恩人です、必ずこのご恩はお返しします」と礼を言った。

けれど、生活が変わって、朋美は学校に戻る気持ちは日に日に薄れていた。結局のところ——人間が薄情なのだと思う。自分のことしか考えられないの。親からの愛情をまともに注がれなかったのだから仕方ないけど。

レモンにそう愚痴った。レモンは何も言わなかった。表情一つ飼えなかった。ウサギ

と身を寄せて暮らすにしては、この家は広すぎた。

朋美はチラシを見ていた。カフェの求人広告だった。アプリで調べると、自転車で20分くらいのところにある。

—— カフェ。

朋美はカフェの店員に憧れていたところを思い出した。中学生の頃は、カフェの店員になろうと本気で思っていた。

母親も兄弟もいない朋美は、家に帰りたくなかった。父と喧嘩して感情を浪費するの
もいやだった。カフェは逃げ込むのに必要なところだった。

静かな音楽が流れていること。夜遅くまでやってること。ゆっくり本が読めること。
店員がわたしに踏み込んでこないこと。

条件に当てはまりそうな、めばしいところを雑誌で見つけては写真に撮ってスクラッ
プした。

そこをシエルターにして生きてきたのだ。

地図を見ながら、『La spina di Imone』を目指していた。

そのカフェは国道から脇道に入った丘の上にあるらしかった。

古い家を改築した店舗は奥が店主の自宅のようだった。シックでノブブルな佇まいの建物の前を、トンビが上昇気流に乗り羽を広げていた。根府川の空はどこまでも透明で広がった。トンビは時折、急降下し、と思うと何かを啜えて、山の方に飛んでいくのだった。

すべてがサイレント映画のようだった。

朋美は胸が高鳴った。石畳の階段に自転車を止めると、扉を開け中に入った。

扉を開けると、薪窯で焼いたパンの香りがした。香ばしいような、くすぐったいようなパンの匂いは女性たちを虜にし、どこから聞きつけてきたのか、嘘のように賑わっていた。

—— 鎌倉にだって、こんなに流行ってる店はなかなかないわ。

ひっきりなしにお客は来るのだった。提げ物が追いつかず、氷の溶けたグラスが置いたままのテーブルもある。少しここで待つようにと入り口のベンチの前で店員が言った。白人の40過ぎの男だった。無愛想な男で目を合わせてモノを言うことはなかった。接客に向いてなかった。席が空くのを待つ間、メニューに目を通していろと言われた。

イントネーションからイタリア人だとわかった。朋美はイタリアのウンブリアにホームステイしたことがあったのでわかった。そう見ると、店内にはイタリアのスナップ写真があちこちに貼られていた。

黄色のギンガムチェックのテーブルクロスも、檸檬色の紙ナプキンを輪になったパスで止めているのも、このあたりの人のセンスではないなと思った。オリーブグリーンのインクで書かれたメニューは、知的で清潔感があった。何を食べても素材の主張があって、バランスよく美味しかった。

「ありがとうございます。すいません。春になったらゆっくり」

扉を開け客を見送る女性が、キッチンの奥から出てきた。ごちそうさま、口々にお礼を言うお客を屈託ない笑顔で見送った。すべての客が見えなくなるまで手を降る姿を見て、すぐに恭子だとわかった。

——
ウソ。

声を掛けようか、知らぬふりして帰ろうか。迷っているのを見透かされたように、

「朋ちゃん。朋ちゃんでしょ？ウソ、どうしたの？」

と恭子の方から、駆け寄ってきた。

「きれいになったからわからなかったよ」

恭子は朋美の手を取り、指を絡めて、何度もジャンプした。

高校時代のままだった。恭子の腕にはパン焼きで付けた火傷の痕があったけれど、手は大きくて柔らかい昔のままだった。

「小田原に戻ってたの？」

「うん、まあ。そっちはなんで？」

「うん、いろいろとあって」

「そう」

「まさか、来てくれると思わなかった」

「知らなかったの。たまたま雑誌見て。おしゃれな店あるんだと思って。恭子がやってるなんて知らなかった」

求人チラシのことは言わなかった。小さな嘘をついた。

「そうなんだ。こんな辺鄙なとこまで、ありがとう」

「人気なんだね。こんなにくさんお客来て、すごい」

奥から夫の無愛想な声がした。与太話はさっさとやめろと言いたげな口調で恭子に命

令した。

「ちよつと、ごめん。スポンジケーキが焼けたの。いま目が離せないの。ごめん」

「いいの。また来る。忙しいのにゴメンね。ありがとう。レモンケーキ、美味しかった。さすが。センスいい」

ああ、帰っちゃうんだね、六時には休憩取れるんだけど。でもな。また来てくれるんだよね。恭子は何度も名残惜しそうに言った。気を使ってるようだった。あのときのことを覚えているのかも知れない。少なくとも朋美は気にしていた。謝らなければいけないのは朋美のほうだった。

朋美が見えなくなるまで、恭子は手を振った。どのお客にも手を振るのを見ていたから、朋美は冷めた目で見ていた。

ペダルを漕いだ。日が傾くと海街の風はひんやりと冷たかった。

恭子は同じ高校のジャズ音楽部だった。恭子はベースで、朋美はピアノだった。クラシックピアノは弾けても、ジャズとなると朋美は手も足も出なかつたので、ジャズは聞く専門だった。当時、大磯に『エヴァンス』というカフェがあり、そこに恭子とよく通

って現実を忘れた。

恭子は美人ではなかったが、清潔感があり、着こなし上手で、なによりセンスとユーモアがあかった。だからモテた。気さくで一生懸命だった。恭子と結婚する人はきつと男として幸せだろう。

——わたしね、おなご先生に憧れて、小学校の先生になろうと思ってるの。朋ちゃん、おなご先生、知ってる？

恭子は私大の教育学部に入り、教員になると決めていた。朋美は横浜の公立大学に入って、学校も行かずカフェで本ばかり読んでいた。まわりも似たり寄ったりで、人と関わろうとするより、本に救いを求めていた。自分と似たような人間の集まりは、気持ちが悪かった。

父親が失踪したのは大学に入って間もなくのことだ。

家庭の事情を知っているのは高校時代の恭子だけだったから、

「父親がなんか出でったみたいでさ」

とエヴァンスで素直に打ち明けた。

「どうせすぐ戻ってくるんだらうけど」

と言いつつも、朋美はもう父親が二度と戻ってこない気がしていた。

「死んじゃえなんて言ったから、真に受けて死んだのかもね、あの人」

「まさか。そんなこと言うもんじゃないよ」

「生きていても楽しいことなんかなさそうだったし」

なぜか恭子は、映画『二十四の瞳』を箱根に見に行こうと誘った。壺井栄の原作は知っていたが、モノクロ映画があることは知らなかった。

渋々だったが、観出したら恭子よりはるかに感動し泣いていた。

そしてその晩遅く、国道のファミレスで、

「だったらさ、朋ちゃんもわたしと一緒に教員になろうよ」と持ちかけたのは恭子だった。眠気覚ましに、美味しくもない珈琲を無理して飲んで朋美の胃はムカムカしていた。

漠然とカフェ店員になろうと思っていたのに、小学校の教師なんて唐突すぎた。

そんな自信もないし、モチベーションがないよと繰り返す朋美を、朝まで恭子は口説いた。

「朋ちゃんはね、きつと陰日向の陰に咲く子供たちに、目をかけてあげられる先生なる。そうなってほしいし。なれると思うし、ね」

老人が大きな犬を連れて、浜辺を散歩している。六時を回っていた。二人はそのあと浜辺を歩いた。深刻な感じはしなかった。ただ柔らかいベッドでなんの心配もせず、どこまでも眠っていたかった。

あのととき。

恭子が熱心に口説かなかつたらどうなっていたかと思う。

人生にはタラレバがないとしても、やっぱり小学校の教師にはなっていなかったろう。朋美は教員採用試験にも合格し、横浜の小学校にも採用が決まった。

それなのに、恭子は教師にならなかった。卒業間際での裏切りだった。

オリーブオイルやイタリアの食材を扱う小さな商社に行くんだと、いつかのファミレスで朋美に打ち明けた。隠し事を晴らしたあとの清々しさで言った。恭子の屈託ない笑い顔だった。

そしてオリーブオイルやイタリアの魅力について熱く語った。バージンオイルは身体にいいから毎朝スプーン一杯飲んだほうがいいと、オイルとスプーンをくれた。

銀のスプーンは白木の箱に入り、『永遠の友達へ、その旅立ちにむけ送る』と、オリーブグリーンのインクで書かれた便箋が入っていた。

その字を見たとき、朋美の糸が切れた。

許せなかった。あまりに自分勝手な言い草ではないか。恭子のすべてが白々しかった。朋美は店内中に響き渡るような大声で、

「散々人をそそのかしといてさ、よくもまあ、こんなことが言えるよね」とオイルをテーブルに叩きつけた。そして、

「あんたなんか顔も見たくない。絶交だよ。偽善者、八方美人、詐欺師。性格ブス。裏切り者」

思いつく限りの悪口を言って、ファミレスを飛び出した。要らないというのにオイル瓶をご丁寧にかバンに入れた。

朋美はその瓶を駐車場の壁に叩きつけた。そしてスプーンは海に投げた。あれから。一度も会っていないかった。

恭子のことを思うと、カフェには行きにくかった。

あんな形で別れたことを思い出したら、なおさら行きにくくなっていた。今思えば、恭子はなにも悪くなかった。別に朋美を裏切ったわけではない。それなの

に感情に任せて、取り返しのないことを言ってしまった。

部屋でピアノを弾いていた。

スタインウェイのチツペンデルだった。父親が買ってくれたもので一番趣味のいいものだった。

春の長雨が続いていた。ラフマニノフを弾いた。湿ったピアノの音色が重たかった。チャイムが鳴った。来客だった。小包だろう。坂の上に住むと、買い物は億劫になり、もっぱら宅配物だけに頼る生活だった。

ピアノを止め、白い引き戸を開ける。あの男が立っていた。

恭子の夫だった。レインコートも髪の毛もずぶ濡れだった。雨は思っていたより本降りらしかった。

「コンニチハ、トモミサンデスネ」

箱を抱えていた。「ええ、はい。どうしました？」

彼は困ったようにうつむいた。目は伏せたままだった。そして深刻な顔で「レモンデス」と言った。怒っている言い方だった。

「まあ、ほんとに？」

朋美は驚いてみせたが少し不愉快だった。できれば関わりたくないのが伝わって、二人は沈黙になった。トタンに当たる雨音がラフマニノフのようだった。

わざわざ尋ねてきた真意が、他にあるのではないかと探ろうにも表情は一切見えなかった。

「これ、買ったんですか？」

「ワタシタチ庭二植エマシタ。コレ、初メテ出来マシタ」

彼は再び怒ったように言うのと、朋美の前に箱を差し出した。

ダンボールは雨に濡れて水分を含んでいた。見かけによらず、ぬっしりと重かった。

彼は箱を渡しきるまでは、朋美に重さを託そうとしなかった。きちんと受け取ったのを確認すると、ようやく手を放した。とても親切な男性なのだと思つた。役目を終えたことにホッとしたのか、夫はちらりと朋美を見てサヨナラと言つた。

——ただの怖がりなのかも知れない。教師だったときのわたしみたいに。

彼は一目散に玄関を飛び出した。

「恭子さんによろしく」という声も届かず、あつという間に敷地を出て行つた。黄色いレモンカラーの傘が子供っぽかった。満開の紅梅に隠れて、黄色い傘はすぐに見えなく

なつた。やがて段々畑の農道に出たあたりで、黄色い傘が見えた。

もうずいぶんと小さかった。傘は立ち止まり、そしてこちらを振り返った。

朋美がまだ見ていることに、意外そうな顔をした気がした。

二人とも遠かつたけれど、目が合っていた。彼は少年がはにかんだような顔で手を振った。そしてそのあとは、一本道を振り返ることはなかった。

恭子を好きになる人は、みんな怖がりなのかもしれないと思った。

校長先生に会いたくなつた。このまま不義理で終えてはいけないという気がした。会って話がしたかつた。

箱を開けるまでは曖昧だった柑橘香が、開けた途端、くつきりとした香りとなつて部屋を包んだ。不揃いの檸檬が箱いっぱい詰まっていた。一つだけ枝付きの檸檬が入っていた。

手紙が入っていた。恭子だつた。オリーブグリーンの彼女の文字が封筒から透けて見えた。窓際の腰掛けに座つて読んだ。

朋美さん。ごめんなさい。

本当に自分勝手なことをしたと思っています。

何度謝っても、許してもらえないものではないけれど、

それでも謝りたい。

ほんとうに、あのときはごめんなさい。

あれからずっと。

いまも。

檸檬の棘が刺さったままです。

『La spina di limone 檸檬の棘』 店主

ウサギのレモンとともに恭子の店に向かっていた。雨の中、歩いていくと30分はかかった。途中で雨は止み太陽が雲の合間から出てきた。駿河湾にうつすらと虹がかかっていた。店に着くと『CLOSED』という看板が出ていた。店は閉まっていた。

——ここまで来たのにな、と朋美は思った。

裏を回ると、自宅に電気が点いていた。チャイムを鳴らすと、恭子の夫が出てきた。先程はどうも、と朋美は言った。

リビングに通され、しばらくすると恭子が二階から降りてきた。今まで寝ていたようだった。顔にタオルケットの跡がうつすらと残っている。

「ごめんなさい。突然、おしかけちゃって」

「こっちこそ、突然、檸檬なんか届けて。お店に来てくれたら渡そうと思ってるうちに、もしかしたらもう来てもらえないんじゃないかと思ったら不安になって」

「もう気にしないで」

朋美は目が合わせられなかつた。合わせたら泣いてしまう。

恭子は、朋美の顔を心配そうに覗いていた。

夫の名前はクラウディオというのだった。相変わらず無愛想だったが、作る料理は絶品だった。桜えびとしらすのピッツアと、ルッコラと伊予柑のサラダが美味しかった。

部屋を見渡すとレモンがいなかつた。どこを見渡しても、見当たらなかつた。恭子とおっしゃべりとご飯で、しばらく目を放していた。

家中、どこを探してもいなかった。

「レモン、レモン」

レモンが返事をするはずもなかった。恭子もクラウディオも熱心に探してくれていた。急に子どもたちのことを思い出した。横浜の子どもたちのことだ。レモンを連れて来たことを、子どもたちの承諾は得ていなかった。ことわりを入れていたのは学年主任にだけだった。

—— まあ、こうなってしまった以上、子どもたちもウサギどころじゃないだろうし。朋美先生が預かってるってことで、まあいいですよ。

と言った。

—— ありがとうございます。あの、おいくらお支払すればいいのでしょうか。

—— 値段か？値段ね。いくらくらいなの？

—— タダでもらうわけにはいきません。

—— そうね。学校の予算で買ったものだからね、はいよとあげるわけにもいかないわな。

調べときますよと言ったものの連絡などしてくるはずもなかった。

クラウディオが庭で叫んでいた。恭子と朋美は外に出た。

クラウディオは空を見上げ指を指していた。そり方向には大きなトンビが浮かんでいた。何が起きているかわからなかった。

「クラウディオ、あすこ」

恭子が指を差した。グリーンの大皿に檸檬が一つ乗っかっているように、ぽつんと芝生にレモンがいた。

「レモン」と朋美が叫んだ。

その声に反応したのか、レモンは兎らしく走りだした。すると、トンビはレモンに向かって真っ直ぐに、音も無く直滑降してくるのだった。

はっ、と息を呑んだ。トンビの前足がレモンを捉えようとしている。

レモンは檸檬の木の下に逃げ込んだ。間一髪だった。トンビは、檸檬の棘を避けるように身体をひねると、そのまま羽音を轟かせ、山の方へと飛んでいった。

三人は呆然と見ていた。一瞬の出来事に何が起きたのかわからなかった。

その夜、朋美は服を着たまま、リビングで寝てしまった。

ラフマニノフが聞こえていた。

母親も父親も朋美もいた。家族はウサギを探していた。

庭に檸檬の実がいつぱい落ちていた。

その中の一つが、ごそごそと動いた。

「みんな、おい、いたぞー。さあ。レモンこっちおいで」と父親が言った。

「あら、檸檬にまぎれてわからなかったわ、お馬鹿さんね、よしよし」と母親が言った。

朋美は幼児の丸い身体を更に丸くして、檸檬の木の下にもぐろうとした。

「おい朋美。檸檬の棘は鋭くて長いからな。用心しないとひっかくぞ」と父親が心配そ

うに言った。

「そんなこと、言われなくたって知ってます」

心配性なのは父親に似たんだなと朋美は思った。

朋美はレモンをそつと抱きかかえると、父親と母親に見せた。

「ほら」

「あんたの帰りを、みんな待ってたんだからね」

母親はレモンの頭を柔らかい手で撫でた。

「レモン。いい？」と念を押した。

「お願いだから、二度といなくなったりしないてくださいね」と朋美はレモンを優しく抱き上げ頬にキスをした。

身体が冷えて目が覚めた。

時計は朝の九時を回っていた。朋美は長い間、眠ってしまったようだった。身体があちこち痛かった。レモンはゲージで寝ていた。

携帯電話が鳴った。学校からだった。

「はい、もしもし」

「朋美先生、わたし」

校長先生が電話の向こうにいる。

「いよいよね、これから卒業式なの。あなたのクラスは立派に卒業していくわ。夕方から謝恩会だから。急だけどいらっしやらない？あなたの帰り、みんな待ってるから。あなたの帰り、みんな待ってたから」

なんと言っているかわからない。

校長先生の声は、夢の中の母親に似ている。窓から眩しい朝日が差し込み、フロアリングに反射している。

受話器を耳に当てながら、夢と現実の境目をさするのように、二の腕の傷跡をさすった。すこしシコリのようなものが指に当たるが、傷はすっかり治っていた。

「わかりました。伺わせていただきます」

これは夢ではない、現実だ。

思い切って、人の目を見て挨拶してみたいと思った。時間がかかるかもしれないけれど、少しはできる気がする。シャワーを浴びながら鼻唄を歌った。とてもうれしかった。柔らかくて丸みを帯びた色白の裸体が、曇った鏡に映っていた。朋美は肥ったようだった。